シリーズ「循環器疾患」⑦

血液をサラサラにする薬

独立行政法人国立病院機構和歌山病院
薬剤部　小野 泰明

シリーズ最終回の今回は、前回の心房細動の治療で出てきた「血液をサラサラにする薬」がテーマです。

血栓塞栓症と呼ばれる病気では、血管内で生じた血栓により血管が詰まってしまい、必要とされる酸素や栄養素をその先に運ぶことができなくなります。その結果、詰まった先は血行障害を起こし、心筋梗塞や脳梗塞等の重篤な結果を引き起こします。血栓塞栓症の原因となる血栓を作る働きは、出血した際に止血するための本来、人の体にとって必要な能力です。ですから、この血栓形成を予防するために使用する「血液をサラサラにする薬」は、出血と止血のバランスを考える必要のある重要な薬です。

それでは「血液をサラサラにする薬」にどのような薬があるのか紹介します。「血液をサラサラにする薬」は、大きく分けると抗凝固薬と抗血小板薬の2種類に分類されます。血が固まるのに必要な要素がたくさんありますので薬のターゲットが異なります。血液を固まりにくくするという作用は同じですが、抗凝固薬は主に静脈や心房細動時の心臓の中など、血流が緩やかでよどみがあるところでの血栓予防を目的として処方されるのに対して、抗血小板薬は主に動脈等の血流が速い場所での血栓予防を目的として処方されます。

抗凝固薬には注射薬と内服薬があり、注射薬ではヘパリンが有名です。注射薬は患者さんが重篤で内服薬が使えない場合や、手術の前後に一過性に使用されます。内服の抗凝固薬は、以前はワルファリンのみでしたが、近年ＮＯＡＣ（またはＤＯＡＣ）と総称される異なるタイプの薬も出てきています。この中でワルファリンは投与量を決めるために定期的な検査が必要となり、適宜用量の調節が必要なことに加え、ビタミンＫの多い食材（納豆、青汁、クロレラ等）の制限も必要です。ＮＯＡＣではこのような投与量の調整や食事制限は必要ないのですが、薬価がワルファリンと比べて高く、ワルファリンのように検査値により効き具合を確認することはできません。それぞれに利点と欠点があり、患者さんに合わせて選択されている状況です。

抗血小板薬は内服薬のみですが、アスピリン、クロピドグレル、シロスタゾール等数種類があります。血小板の働く仕組みには薬が作用する箇所も多く、これらの薬以外にも異なる作用機序を持つ薬剤が存在します。

次に服用中の注意点です。「血をサラサラにする薬」を服用している間は血が止まりにくい状態であり、出血した際に特に注意が必要です。目に見える出血以外にも消化管での出血等もあり、便の色など日々の体調の変化にも注意が必要です。また、体をどこかにぶつけた際には、内出血も起こりやすくなっています。他にも病院や歯科で手術や抜歯等、出血を伴う可能性のある治療を受ける際には、適切な休薬期間が必要となる場合もある為、病院を受診される際には服用している薬剤をしっかりと伝えてください。その他にも多くの注意点があり、処方される際に医師や薬剤師からの説明をしっかり聞き、理解した上で服用することが重要です。

ここまで紹介してきた「血液をサラサラにする薬」ですが、血栓塞栓症予防の為に飲み忘れないようにすることが非常に大切な薬です。さらに、出血のリスク、食事の制限や使用上の注意点も多く、安全かつ適正に使用していくには患者さん自身が内服する目的や注意点等をしっかりと理解しておく必要があります。治療を行っていく中でご不明な点がありましたら、お近くの薬剤師までご相談ください。

今回で七回にわたり連載してきた循環器疾患シリーズは終わりです。狭心症・心筋梗塞を引き起こす動脈硬化、心不全、心房細動と脳梗塞の話をとり上げてきました。自分の健康は自分で守る、健康のセルフチェックのきっかけにしていただければ幸いです。